

小林人

こばやしびと
Vol.39



写真上)炭化したもみ殻を混ぜた土。「この技術を使い楽になったと言ってくれる人がいることが何よりもうれしい」と、その人柄を垣間見せる下)年間に作る育苗箱は約2,000箱。仕事をしているときの表情は、真剣そのものだ



本賞受賞は、県内では2例目

田植えの季節、稲作農家に休みはない。進む機械化の中でも、人の手でなければできない作業は残っている。その1つが育苗箱の運搬。腰や肩に大きな負担がかかる重労働だ。両親と3人で農業を営む漆野智規さんは、「少しでも作業を楽にし、効率をあげられないか」と頭を抱え続けていた。

を軽量化する方法にいきついた。結果、約25%の軽量化に成功。さらに、土の中に適度な空間ができることで、根の張りがよくなり実のなる量も増加した。

この独創的な技術を第53回全国青年農業者会議で発表。土地利用型部門で農林水産大臣賞を受賞した。

青年農業者会議には、若手農業者があつまるSAP（サップ）^{サップ} 会議会員のうち各地区予選を突破した人たちが出場する。勝つためには、内容の革新性だけでなく、分かりやすい説明や農業に対する熱い思いを表現することが必



父修さんと作業。「新しいことへの挑戦も大切だが、父から教わる昔からの知識が基本」と漆野さん

要。しかし、智規さんは人前で話すことが苦手だった。発表することを決めてから、持ち前のひたむきさを生かし、SAPの仲間と研究や人前で話す練習に励んだ。同会議の仲間で、特に積極的に協力してきた大出水拓磨さん（おいでみずたくま）は「魅力的なアイデアを手伝いたくなかった。誰よりも練習している姿が印象的」と努力を称賛する。そして、日本一という結果に辿り着いた。

「受賞できたのは多くの人の協力のおかげ。高齢化が進む中、この技術が全国に広まり負担が減ればうれ

しい」と感謝の気持ちとこれからへの期待を話した。「今後は稲作以外にも手がけている養鶏で、もみ殻を使った家畜小屋の消臭にも取り組んでいきたい」と、現状に満足することなく探究心を持ち続けている。

「未来のことは分からないが、常に新しいことに挑戦したい。課題を乗り越え、時代の変化に対応する。これからも、美味しい米や鶏を育て続けていきたい。」

若さあふれる漆野さんの挑戦は続く。若手の中心となり、小林の農業を支え、けん引していくに違いない。

常に新しいことに挑戦し 課題を乗り越えていきたい



第53回全国青年農業者会議
農林水産大臣賞受賞

うるしのともき
漆野 智規 さん